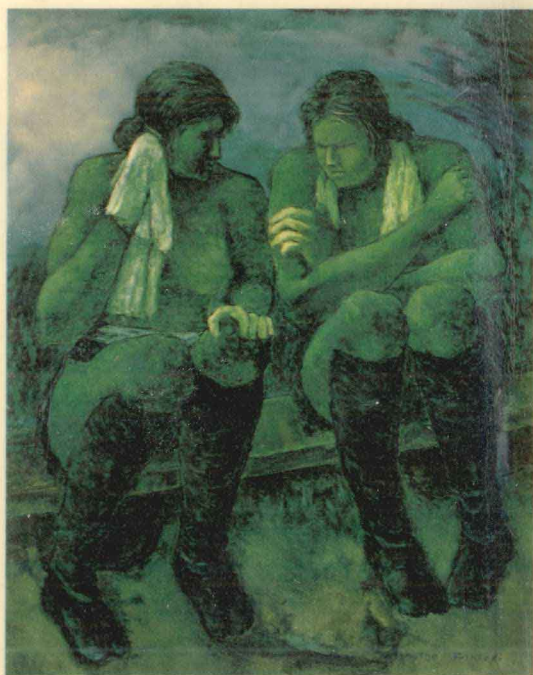


井手川泰子

火を産んだ母たち

女坑夫からの聞き書

葦書房



井手川泰子著

火を産んだ母たち

女坑夫からの聞き書



葦書房

著者略歴

昭和8年生れ。現在鞍手町高齢者事業団で働きながら、女坑夫からの聞き書、農村の変遷、被差別部落からの採話等、貴重な聞き書が続けている。

現住所 福岡県鞍手郡鞍手町新延201-1

火を産んだ母たち

女坑夫からの聞き書

昭和五十九年十一月十日初版印刷
昭和五十九年十一月十五日初版発行

定価 一三〇〇円

著者 井手川 泰子

発行者 久本 三多

発行所 葦書房有限公司

福岡市中央区赤坂二丁目一四番二一号
電話 福岡 〇九二(七六一)二八九五

振替 福岡 一三九四三〇

印刷
製本 凸版印刷株式会社

©1984 Yasuko Idegawa

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

0095-8448-0135

火を産んだ母たち

女坑夫からの聞き書

* 表紙絵・文中カット

石井
利秋

〈目次〉

タカさんの蝶ちよ へはじめに

4

流転

11

大力女ご

33

ヒグラシ女ご

57

切られ婆あ

87

木ノ葉女ご

105

二カン函

121

どびき牛

143

夢のふるさと

171

七つ八つから

195

鍋の中のどじょう へあと書きに代えて

207

タカさんの蝶ちよ

〈はじめに〉

筑豊に住む元女坑夫からの聞き書が始まるようになって、もう七年の月日がたってしまった。年々消えて行くその足跡をたどりながら、スカブラ（怠けもの）の私がこれまで歩いてこられたのは、何といっても、その間にさまざまな出会いを重ねてきた、多くのヤマの老女たちのおかげである。

老女たちが、川筋言葉で手取り足取り教えてくれた筑豊の姿を手繰り寄せながら、この七年、石炭と共にこんな女の人生があったのかという感動につき動かされて歩いてきた。それにしても何ということだろう。子どものころから筑豊に住みながら、暗い坑底にテボをからい、スラを引き、切羽に乳を滴らせていた地底の母たちのことを、私は何も知らずに過してきたのだ。その申しわけなさに胸がいっぱいになってしまう。

炭塵をかぶって逞しく漲っていた母たちの黒い乳房も、今はもう注ぎ尽くして萎えてしまった。けれどもその胸のうちに、涸れることのないヤマの女の思いを持ち続けている彼女らこそ「女たちの筑豊」の、唯一の語り手なのだ。

筑豊の果てまでも歩いて、その姿を探したいと思う。残り少ない彼女らの時間を追いか
けねばならない。この冬、私はまた一人、貴重な語り手を不意に失ってしまった。

五年間つきあってきた河島タカさん。九十六歳のその年輪から、どれだけ私の知らない
筑豊の姿を教えられたことだろう。死後の、今もなお彼女の存在は重石のように私の心に
のしかかっている。

彼女の死を私に告げたのは、近所に住む話相手の松本トミさんである。実は、トミさん
からはその数日前にも電話をもらっていた。

タカさんが私に会いたがっているというのである。心は動いたけれど、例年になく雪の
多い寒の最中でもあり、訪問の約束を先に延ばしてしまった。

訃報を聞いたのはそれから間なしである。不意の死だったと慰められても、私はただ後
悔の涙を流し続けるばかりだった。

三度のメシより歌が好きという一人暮らしのトミさんの家は、近くの老女たちの気楽な
たまり場になっていて、タカさんは、最年長だけれども元気な常連であった。

興がのると、首にかけた手ぬぐいをひょいとねじって、向う鉢巻きをぐいとこねあげ、
歳とも思えぬ艶のある声で歌う彼女の、その鉢巻きをこねる手つきに私はよく見とれたも
のである。

好きで好かれて 惚れ合うて

一夜も添わずに死んだなら

私や菜種の花と咲き

おまえ蝶々で とんで遊ば

タカさんが好んで歌った炭坑節の文句である。いつも聞かされるので、何か艶話の思い出でもあるのかと聞いてみたけど、

「三十三の歳で宮崎から炭坑さへ来るとばい。十人の子を育つるとに、イロ気も何もあるもんなっ」と素っ気ない言葉が返ってきて、私は少しがっかりしたものだ。

けれどもその時、タカさんはひどく真剣な顔をしてこんなことを教えてくれた。

「うちにゃイロ恋はなかつたけど、夢があったとばい。大きな夢じゃった。一旗上げて故郷へ帰るちいう夢たい。それが叶わんやったとが今でも、まだ残念でならんと……」

無念の思いがこもっているようだった。故郷を出て六十年もの年月が経っている。女坑夫として死物狂いで働き続け、辛酸をなめ尽くした年月をようやく越えて、今もなお彼女は故郷に執着し続けているのだらうか……。

「もう戸籍もこっちに移しちやるたい。帰ったちゃ家もなあもない浦島太郎やきね。うちはやっぱあここがよか。友だちもおるし……」

何かを吹き払うような声になっていて、タカさんの表情はもう笑っているようだった。「そうよねばあちゃん。ここがばあちゃんのふるさとたい。トミさんたちもおるし、みんな一緒に苦勞を分け合うてきた仲間ばかりで毎日話ができて、タカさんのふるさとほこよ」

私は本当にそう思っていた。筑豊こそ彼女の故郷だ。ここにはタカさんの汗がしみついている。彼女はここで力の限りに生きてきたではないか。

取材が目的ではあったが、何度か訪ねるうちに、取材などどうでもよくなっていた。私はただ、働き抜いたタカさんの萎えた乳房の優しさのようなものにひかれて足を運び続け、いつか問わず語りのうちに、ひょいとする話の合槌を打っていただけである。けれども、「うちにも夢があった」というタカさんの言葉は奇妙に心に残ってしまった。

この夢に支えられて、彼女はどれほど働いたことだろう。働いても働いても、夢には近づけなかったそのくやしきの向うで、故郷はタカさんの心にいつまでも美しかったようだ。

それを思い知らされる時が来た。

一人暮らしだったタカさんの骨は、故郷の宮崎のお寺に納められて、私はとうとう線香をあげることもできないままに、彼女と不本意な別れ方をしてしまった。訃報を告げたトミさんは、困ったような声で私にこうだったのである。

「急いでおまいりに来なんでもいいですよ。ばあちゃんは宮崎さへ行ってしまうた。ここにはもう何もないとです。線香あげようにも位牌さんも写真も、何もないことなつて……。うちも寂しうてならんです。ばあちゃんも一人で寂しかろうに……。せめて初盆まで置いてもらいたかったけど……」

あの方方は涙声になっていた。

タカさんが宮崎へ還つたことに、私はショックを受けていた。タカさんの戸籍は筑豊にあるのだ。この土になるはずだった。筑豊の住人ではなかったのか……。どうしてここに眠ってくれないのだろう。タカさんにとって筑豊は何だったのか、私にはわからなくなつてしまつた。

煙のように消えてしまつた彼女の足跡を、どうしてたどればいいのだろう。不意に、
「うちにも夢があつた。故郷へ帰る夢たい」

タカさんの声が耳に戻つてきた。彼女はやつと死によつて六十年間心に抱き続けた夢を實現したのではないか。そう思つた時、音をたてて流れるように、涙があふれてきた。

筑豊は、彼女にとって、ついに「終のすみか」になり得なかつたのだ。故郷を捨てて出た思いがどんなものか、タカさんの胸のうちも知らずに、筑豊がタカさんのふるさとだと、私はよくもぬけぬけといったものだ。

この五年間、私はタカさんからどんな話を聞いてきたのか、もう一度知りたくなつて、

彼女のテープを聞き直してみた。

夜神楽の寄せ歌があった。馬子唄もあった。まぎれもない彼女のふるさとの唄である。菜種畑の向うを、馬に乗った花嫁さんが通ると、走って見に行つた子どものころの話……。

タカさんの好きな炭坑節の、あの菜の花の歌を繰り返し聞いていると、私にはだんだん何かが見えてくるような気がした。

故郷へ帰りたいという夢と、あの歌はつながっているのだ。菜の花に遊ぶ蝶は、タカさんの自由への憧れなのかもしれない。彼女は蝶のように飛びたかったのではないだろうか。

暗い地底から見る蝶は、タカさんの目の中でどんなにひらひらと美しかったことか。それは、自由そのものであり、飛び行く先に故郷の菜種畑が広がっていたに違いない。

どのヤマに有付いても、一つ話になるほどの働き者だったという彼女は、故郷への夢がある限り、どんな辛い労働にも耐えてこられたのではないだろうか。

春になり、菜の花が今年も遠賀土堤を真黄色に彩り埋めた。

タカさんの蝶は、なぜか私には黄色い蝶に見える。彼女は今黄色い蝶になり、故郷の菜の花畑で、ひらひらと自由に舞い遊んでいるはずだ。そう思うことにした。

悔恨ばかりに責められてきたけれど、タカさんは許してくれるだろう。私が女坑夫たち

を追い続ける限り、彼女は得意のねじり鉢巻で後押しをしてくれる。タカさんは、そんな筑豊のおなごなのだ。

トミさんの家は相変らず老女たちのたまり場になっている。時にはカラオケの歌声も響いてくる。石炭と共に苦楽を分け合ってきた老女たち。涙の出る思いも多いはずなのにこの明かるさはどこから来るのだろう。

一日、彼女たちと旧炭坑街を歩いて回った。ここが購買会、ここが事務所の勘定受け場、ここが浴場、ここが職員の偉い衆しゅの社宅……。坑長の社宅は門構えである。

「天皇陛下さんと田吾作ほどの違いばい」

職員と坑夫の差別を、トミさんはそう表現した。背中の丸くなった彼女を、私は抱くようにして歩く。タカさんと一度こうして歩きたかった。彼女の足跡が消えてしまった今、せめて体を寄せ合う温もりを通して、私の体の中にタカさんを残していたかったと思う。女坑夫は確実に消えて行く。筑豊の一つの終焉を感じさせたタカさんの死に教えられたことは多い。彼女にとって筑豊とは何だったのか、その答えを求めて私は歩き続けようと思う。

流 転

老人センターに行くのが、毎日の仕事のげなもんたい。朝、神経痛の病院に行って、電
気にかかってから、それからぼちぼち歩いて行くとです。

病院にゃ、たいてい年寄りのどし（友達）がおって、何やらかんやらちいとたらたら言
うて歩きよると、道中は早いですたい。昼ごろにはたいてい行き着くですきね。

センターでふろに入り、弁当たべる時に、しょうちゅうをちいと飲んで、皆とテレビを
見たり、話をしたりが年寄りの楽しみたい。ほかに何の楽しみがありますな。ばあさん一
人の暮らしに……。

三人添うた亭主にゃ三人共死に別れ、子供はおらんし身も軽いし、いつでもことごと死
なるるですたい。

まあ、いよいよの時は、大阪におる弟が、「姉さんにゃ世話になっとるき、心配せん

もわしが看ちやるきな」というてはくれよるが、どげなるもんか。しまえることなつて看てくれるよか、生きとるうちに、しょうちゅうの一回でも飲ませてくれた方が、なんぼありがたいですな。

私のごと、家のために働いた女ごはあんまりおらんやろと思うですばい。体まで売って尽くして、年取りや役場の世話にならならん……。

まあ、ぐちをこぼしたちゃきりがないたい。良い飯食うた時もあるとやき、後は見らんごとすばいとしとかにやと思うとる。いよいよになりや首でもつりたい。けど山ん中であくれては死なん。役場の前でぶら下がるばいというたら、「そんな時は下から足引っぱって加勢してやるきね」という者もおったが……。

ヤマで暮らした人間は口が悪いけど、中味は良いですばい。つき合うてみにやわからん良さがあって、こげなバカいうたりしよるけど一人ちゃやっぱりどうもこうもならん寂しい時がありますきね。そげん時はしょうちゅう飲んで、その勢いで寝るしか方法がないとたい。

十四の時から坑内に下がり、十七から二十三まで身売り奉公して、酒はここで飲むことなつたとたい。年が明けてからもこっち、十四、五年ぐらいいは坑内に行つとるですきね。

そんだけ働いて七十になつてもまだ、飲まにや眠れんげな一人暮らしの夜があるちゃ、どうしたバチかぶつたもんかねえ。

父親が病氣になったので、十四の時に初めて他人先山^{たじんきやま}について坑内に入ったとです。

この通り体が大きいもんで、年は十六とごまかしとった。十四じゃ志願ができんきね。

切羽^{きりば}まで百間も歩かなならん所やった。それも空^{から}五体やないばい。カンコヅル三、四本、カスガイ、ノコ、金札、弁当に水筒……。弁慶の七つ道具のごと持って歩いてんなさい。手が抜けるごとあるばい。子どものする仕事とはいわれんですばい。

坑内の暗さは、いよいよの真っ暗やみ。目の前一寸先もわからん。カンテラが消えた時の心細さはたまらんばい。そばにだれもおらん時は、手探りでレールを伝うて、かねかた(曲片)に這うて出らんならん。ぐずぐずしよりや先山さんから怒られるやろがね、そげなめに会うと、はなのうちは恐しいで、坑口を入っても足が前さへ進まんごとあったですばい。

子どもの頃は、うちはばあさんに育てられてホンおとなしい鷹揚な子やったんきね。十八の年でうちを生んだおっ母さんは、男の持ち運が悪いで、うちは実の父親の顔は知らんままたい。

ばあさんに預けられとったので、かわいがられて育てられた。ちいと役に立つごとふとり上がったら母親が今度は頼りにするとい。

大人の勝手であっちにやられ、こっちにやられしたが、うちは素直なもんたい。坑内の暗すみん中に下げるちゃむげない。どこか町場の髪結いさんでも奉公させたらよからう

と、年寄りが泣くごといいいったげなが、義理のお父さんが病氣して、四人弟妹の一人はまだ乳飲子では、うちがここで母親に加勢せなどもならない。

体が大きい力が強かったけど、牛のごとの一っとして気がきかん、いつも人の後から仕事しよったげな私やったが、二年もするうちに結構、家の米びつになつとつたです。

その代りに目の前の死人も見た。ハッと身をすくめる瞬間もあった。ちよっとの怪我など何回もあるとです。残された者の悲惨も見た。明日はわが身と思うたら、人間それなりの氣持にもなりますばい。けど男のごと、どまぐれるわけにはいかんでしょうが……。

家族の煩惱を捨てきらんばかりに女ごは苦勞するとですたい。

十六、七は娘ざかりというけど、夜明けから日暮れまで、日のめに当ることのない所におるとやろがね。おろしぞて卸底からテボでからい上げる時は、シュモク杖ついて、汗はすたすた、すだれのごと流れ落ちる。足もとはつるつる水びたし、背中はびしょびしょ水がたれよる。

わらじは水を吸うて破れるき、替えのわらじをいつも持って行くごとせなたい。切れたわらじをひぎに当てて、這うてさるく所もあるとばい。

水には当っても日のめには当らんき、色だけは白かったねえ。坑内美人といわれたもんですよ。器量はわるいが、ぼってりと肥えて柄が大きかったき見栄えみはがするとたい。

正月には高輪のまげを結うて、羽根のかんざしをさすと、近所のおばさん達が、「まあ